

伏屋の獅子舞 Sisimai of Fuseya

1K07B113-5

指導教員 主査 寒川恒夫 先生

杉江陽輔

副査 杉山千鶴 先生

【序章】

伏屋の獅子舞とは岐阜県羽島郡岐南町伏屋にある白山神社祭礼の際に奉納されてきた伝統民俗芸能である。伏屋の獅子舞は大きく分けて「神楽獅子」と「獅子芝居」の二つに分けられる。神楽獅子とは白山神社祭礼の際の奉納で行われる、悪魔払いを中心とした獅子の舞である。獅子芝居とは獅子が歌舞伎の外題を演じる芝居である。この論文では伏屋の獅子舞について、出来得る限りの情報をまとめたいと考えている。この論文が伏屋の獅子舞の伝統を守り、後世に伝える一つの手段となれば幸いである。

【第一章 獅子舞】

日本における獅子舞は多種多様なかたちの獅子舞が全都道府県に存在している。獅子舞を演じる人数構成で分類すると、獅子本来の四足で演じる二人立ち系、三人以上から多い場合は百人ほども入る多数立ち系、一人で演じる一人立ち系がある。全国的に見れば、二人立ち系が全国に広汎に分布しているほか、多数立ち系が比較的日本列島の中央部付近に多く、一人立ち系が関東・東北に集中している。わが国への獅子舞の伝来は『日本書紀』によれば、推古天皇時代(612)奈良の桜井に味摩之(みまじ)が伎楽を伝えた際、その一部に「師子」(獅子の原語)を含んでいたことから、これが公式な記録となっている。その後、「舞楽」や「散楽」が獅子舞に影響を与えた。

東海地方の獅子舞と言えば、獅子が歌舞伎の外題を、獅子頭のまま演じる「獅子芝居」が知られている。そのはじめは三河の大神楽から発生したと言われ、尾張の市川柳助・嵐酒徳・沢村大悦など数々の名優によって工夫洗練され、竹本も加わる現在も見られる獅子芝居の型を完成した。

岐阜の獅子舞には大きく分けて神神楽(かみかぐら)と獅子芝居の二種類がある。獅子頭は、神神楽は一般的に雄獅子の場合が多いが、獅子芝居で用いられる獅子は雌獅子である。

獅子芝居は太神楽系獅子舞が神事舞の余興芸として演じてみせる芸の一種で、歌舞伎や人形浄瑠璃の外題を、獅子頭を被り演じる。獅子が演じる役は女形の主役が多い。そのためか、もともとその地に伝わる獅子舞が雌獅子だったからか、総して嫁獅子と呼ぶ地域も多い。

【第二章 伏屋の獅子舞】

岐南町における諸村は古来歌舞伎系芸能が鑑賞されてきたようである。伏屋の獅子舞はこうした岐南町域の芸能的風土に育まれて伝承されてきた。明治時代、市川柳助の芸風を継いだ伏屋の東五郎が一座を率いて近村を巡業した。これが伏屋における獅子芝居のはじまりと考えられる。昭和中期頃まで白山神社祭礼の際の神楽獅子は「青年団」が、獅子芝居は「旭組」が行っていた。現在伏屋の獅子舞は後継者不足による消滅の危機に立たされている。

伏屋の獅子舞の奉納は伏屋にある「白山神社」祭礼の際に行われてきた。

神楽獅子は「道行」、「寄」、「悪魔払い」から成る。道行は伏屋の獅子舞独特のゆったりとした軽妙な音楽を奏でて村を廻り、祭礼や公演を知らせる。寄は激しいリズムで人を寄せる。悪魔払いには五穀豊穡・家内安全を願って舞手が獅子頭をかぶり笛と付太鼓、唄に合わせて舞う舞である。「幕の舞」、「幣の舞」、「上の舞」、「下の舞」で構成される。幕の舞は、悪魔払いの最初の部分であり、「正殿(しょうでん)」、「下がりは」、「三つ唄」で構成される。幣の舞では幣と鈴を持って舞が行われる。上の舞では幣と鈴で曲芸を演ずる。ここでは鈴掛けなど難易度の高い芸が行われる見せ場である。上の舞には「上げ」が含まれる。下の舞では傘を使って曲芸を演ずる。ここでは笛と付太鼓のリズムが激しくなり、拍子木も入り、雌獅子から雄獅子へとなる。

伏屋では獅子が芝居を演じる獅子芝居の他に、獅子が登場しない歌舞伎芝居も行われてきた。伏屋の獅子舞では「傾城阿波の鳴門」、「心霊矢口渡」、「忠臣蔵 三段目と七段目」、「朝顔日記」などの外題が演じられてきた。

【終章】

現在伏屋の獅子舞における急務は長い伝統を持つ神楽獅子の火を絶やさない事である。そして伝統民俗芸能の生きる道は『専門的継承』にある。私の夢は伏屋の獅子舞を日本一の獅子舞にする事だ。伏屋の獅子舞において必ず獅子芝居を復活させ、日本一の獅子舞と誰もが認める伝統民俗芸能となるよう、私の人生の総てをこの伏屋の獅子舞に捧げることを、ここに誓う。